

## 音楽を聴く - 今は昔の話



随 筆

内 海 成 治\*

Listen to the classic music - Once upon a time

Key Words : LP, Classic music, JBL, Coffee shop

今の若い人たちはどのように音楽を楽しんでいるのであろうか。音楽と言っても私の場合にはクラシックである。私が学生の頃（1960年代後半）の話とその頃購入したレコードを中心に私たちがどのようにクラシックを聴いていたかを思いつくまに描いてみたい。数えたことがないので分からないがクラシックのレコード（LP）を数千枚集めてたが、度重なる引っ越しで分散していることもあり、記憶を頼りに書くので、思い違いもあると思うがお許しいただきたい。

1946年生まれ私はこの1月で68歳になった。焼け野原の東京で生まれた私はまさに「三丁目の夕陽」の世界で育った。小学校六年生の時に東京タワーができた。小学校の行き帰りにだんだん高くなってゆく東京タワーを見ていた。この68年間、音楽メディアも大きく変化した。私が小学生のころは78回転のSPレコードしかなかった。家にあったクラシックのSPレコードはストコフスキーの指揮するリストのハンガリー狂詩曲であった。1枚の裏表に入っていたように思う。せいぜい10分程度の音楽であった。

そのころのレコードと蓄音機はとても高いもので、一般の家庭にはとても手の出ないものであった。どういうわけか私の高校生の頃SPとLPの両方を聴

くことのできる蓄音機があって、その装置で聴いたと思う。SPの針は鉄製で2、3回聞くと取り替えねばならなかった。雑音の中から音楽が聞こえてくるようであったが、音楽を自分のものとして好きな時に聞くことができるのは大きな喜びであった。

1950年代後半から普及しはじめたLPレコードは、国内盤が千円程度、輸入盤は3千円程度と非常に高価なもので、普通のサラリーマンの給料の半月分位した。音が良いとされたイギリスからの輸入盤はもっと高価だった。その後私が大学生になったころに、家に日本ビクターから出ていたトスカニーニ指揮NBC交響楽団によるベートーヴェンの交響曲全集があった。このレコードは大学1年の夏休みに帰郷した際に毎日1番から9番までを数時間かけて聴いていたので、すっかり覚えてしまった。そのためベートーヴェンの交響曲というトスカニーニのアップテンポでザハリッヒ（即物的、楽譜に忠実なこと）な演奏しか受け付けなくなり、当時もっとも人気のあったフルトヴェングラーやワルターのレコードを聴くと強い違和感すら覚えるようになった。

## 名曲喫茶のこと

私は京大に進学したので昭和40年（1965年）から7年あまり京都に暮らした。半世紀前のことだから古い話である。当時の京都市内は市電が走っており、どこに行くのも便利であった。しかし、学生は貧乏で電車にも乗れずいつも歩いていた。そんな中でよく行ったのが名曲喫茶（とても懐かしく響く）である。名曲喫茶とは多分東京渋谷の道玄坂にあった「ライオン」と言う店が老舗ではないかと思う。この店には高校生の頃によく聴きに行った。

京大の周りには3つの名曲喫茶があった。一つ目は出町柳の駅前に今もある「柳月堂」である。階段を上ると目の前にガラスケースに入った2台のレ



\* Seiji UTSUMI

1946年1月生  
京都大学 教育学部 教育学科 (1972年)  
現在、京都女子大学 発達教育学部 教授  
大阪大学名誉教授  
博士(人間科学) 国際教育協力学  
TEL : 06-6854-2504  
E-mail : ICH42756@nifty.com

コードプレーヤーが並んでいる。その30cmの円盤をみただけで、胸が高鳴った。店内は広くて30以上のテーブルがあったと思う。客はほとんど学生だが目をつぶって熱心に音楽を聴いているので、音を立てるのも申し訳ないような雰囲気であった。コーヒーを頼むのも小声あるいはメニューを指さして店員に頼むようだった。たしか3時とか6時とかに演奏する曲名を書いたプログラムがあった。それ以外の時間はリクエストもできた。この方式は後の2つの名曲喫茶も同じであった。

スピーカーはカーテンの奥にあり機種は分からなかった。主にフルトヴェングラーやワルターの指揮する交響曲が鳴らされていた。トスカニーニ好きの私には不満であったが、静かな雰囲気にひかれてよく通った。

2軒目は銀閣寺道のすぐ南にあった「ゲート」である。ここは小さな喫茶店で大きな箱型のスピーカーが壁に設置されていた。ここは良い音楽が流れているコーヒーハウスと言う感じの店で、下宿が近かったこともあり気軽に出かけて行った。

3軒目は「シンフォニー」という名前からしていかにも名曲喫茶らしい店で、これは岡崎にあった。ここも小さい店で、椅子は10脚くらいで、皆スピーカーの方を向いて座る。巨大なホーンスピーカーが隣の部屋から伸びていて非常にマニアックな雰囲気であった。たしか、入り口で注文して店内では無言で過ごした記憶がある。ホーンスピーカーの刺すような音があまり好きではなく月1回ぐらいしか行くことはなかった。

現在残っているのは出町柳の柳月堂だけであるが、当時は音楽に飢えた若者がこうしたお店で音楽を楽しんでいたのである。それも音楽媒体のレコードとその装置、当時はハイファイ HiFi と呼んでいたが、非常に高価だったからである。

名曲喫茶ではないが私がコーヒーを飲みながらクラシックを聴きに行った喫茶店(円居、まどい)が大学の近くの近衛通りにあった。教養部の裏手に当たり小さなお店だが、クラシックレコードと装置があった。店のマスターの趣味だと聞いたが、良いレコードがそろっていた。そして何よりも30センチのレコードプレーヤーが備えられていた。私は下宿に再生装置がないので買ったレコードはこの店に持って行ってかけてもらっていた。

当時、FM放送が始まって、友人がアルバイトをして手に入れたFMの聴けるラジオと一緒に聞き惚れた。また、外国の雑誌に出ていたJBL(ジェームス・B・ランシングのことで私たちはジムランと呼んでいた)の広告を見て、いつかこんな装置で聴いてみたいと思った。それはランサーシリーズの広告で、ステレオの場合にはペアーで50万もするスピーカーだった。1か月1万5千円で暮らしていた学生には天文学的金額であった。私はその当時の夢を追って、現在は古いジムランのスピーカー(ランサー99という)を使っている。

### はじめてレコードを買う

大学1年の冬のある日、河原町を歩いていると三条通りを少し北に上がったカトリック教会のそばに十字屋と言うレコード店があった。二階がクラシック売場であった。買うことはできないけど見るのは自由だと入っていった。すると売れ残りや傷ついたレコードの安売りが行われていた。3000円以上の輸入盤が一枚300円で売られていた。これなら買えると3枚を厳選して手に入れた。それでもそれから2、3日昼食を抜いたように思う。

1枚目はヘルマン・シェルヘン指揮、ウィーン国立歌劇場オーケストラ(ウィーンフィルと同じメンバー)によるハイドンの交響曲92番オックスフォード(ト長調)と94番驚愕(ト長調)を組み合わせたWestminster(WL5137)盤である。ウェストミンスターと言うレーベルはマイナーレーベルの雄と言われてヨーロッパで録音して、安い価格で販売していたアメリカのレコード会社である。戦後の疲弊したヨーロッパで、優れた演奏家の録音を次々と行った。指揮者のシェウヘン、ロジンスキー、ピアニストのクララ・ハスキル、バリリ弦楽四重奏団、ウィーンコンツェルトハウス四重奏団などで、CDの時代にもファンの多いレコードを出した。

シェルヘンはスイス国籍だと思うが戦後のヨーロッパにおける現代音楽の紹介者として有名であり、また、バッハのカンタータを次々と録音するなどバッハのスペシャリストとしても知られていた。シェルヘンの指揮は伝統にとらわれず徹底的にザハリッヒな演奏を行った。誰の指揮よりも速度が速く、聴き手に迫る迫力がある。このレコードでも92番の第1楽章の序奏から第1主題にかけての強弱やテン



シェルヘンのレコードジャケット

ポの変化にその特徴がよく表れている。また、94番の例の第2楽章の驚愕の部分の強弱のつけ方は強烈で、本当に驚愕する演奏である。ジャケットはhをデザインして3色に塗り分けるといった珍しいデザインであった。

その後、レコードが買えるようになってから多くのシェルヘンのレコードを購入した。私が彼のレコードで最も素晴らしいと思うのはバッハのマタイ受難曲である。このレコードはLPと同じ装丁でCDが発売されている（WVCW・14012-4）。ヘルマン・シェルヘンには熱狂的な愛好家がいるようでCDの時代になってもつぎつぎと往年の演奏がCD化されており、現在でも彼のほとんどの録音は手に入れることができる。

2枚目は当時のソ連のレコード（D-05236/37）でダビッド・オイストラッフのヴァイオリンとドルフ・バルシャイのビオラによるモーツアルトの協奏交響曲変ホ長調K364である。これは名うての名手による稀代の名演であった。その後、多くのこの曲のレコードを手に入れたが、この演奏に勝る演奏を聴いたことがない。冷戦時代のソ連の演奏家はレコードでしか聴くことができなかったのだが、オイストラッフとバルシャイの名声は鳴り響いていて、日本にも輸入されたのだと思う。オイストラッフは知らない人のいない名手であるが、バルシャイはビオラの名手あるいはモスクワ室内管弦楽団の指揮者として知られていた。現在、再評価されているようでバリシャイのCDの全集がロシアで発売されている。

ジャケットはモスクワの地図をあしらった統一ジ

ャケットで味もそっけもないデザインであるが、音は素晴らしかった。ソ連のレコードはイコライゼーションが異なるようで、通常のアンプでは少し音が異なってしまうということであったが、そんなことは全く気にならなかった。ともかく名演である。

このレコードを先に述べた近衛通りの「円居」に持って行って聞いた時には、あまりの名演にそこにいた京大オーケストラの学生から、何とか譲ってほしいかと申し出があったことを覚えている。

3枚目はアメリカVOXのモーツアルトの「13管楽器のためのセレナーデ」変イ長調K361（PL7470）である。当時は全く聞くことのない曲で、どんな曲だろうと思って購入した。演奏はウィーン交響楽団管楽器グループである。7つの楽章からなる長大な管楽器だけの曲が全く飽きることなく聴くことができるのである。モーツアルトの天才がいかに幅広いものであるかを知った。この曲はヨーロッパでもあまり演奏されないが名曲である。モーツアルトの伝記映画「アマデウス」の中でモーツアルトの天才を示す曲として使われていた。サリエリがこの曲を聴いて自分とは次元の違うモーツアルトの天才に驚き殺害を企てるのである。

後に手に入れたいくつかの盤では指揮者を立てて演奏されているが、これは指揮者なしの演奏であるが演奏者それぞれが渾然一体となったもので、管楽器の音がかくも美しいものかと驚かされた。

## 国内版の購入

このころに購入した最初の国内盤はクララ・ハスキルの弾くモーツアルトのピアノ協奏曲19番（ハ長調）K459と20番（ニ短調）K466で、日本製のモノラル盤で1000円であった。ウエストミンスターの録音である。ハスキルはルーマニア出身でスイスに住み1960年に65歳で亡くなった。しかし、現在でもモーツアルトのピアノ曲を聴く時には、私はハスキルの音が常に浮かんでしまう。高潔な音、心の風景を美しくする音とでも言ったらいいのであろうか。日本にはハスキルのファンが多くたくさんCDが発売されている。ハスキルのことばで私が好きなのは、なぜそんなに練習するのかと聞かれて「私はピアノが下手だからです」と答えたという。彼女の理想の音はもっと先にあったのである。

また、初めて購入したステレオレコードは、東芝

音楽工業のモーツァルトの「戴冠ミサ曲」K317 (AA8151)、カール・フォルスターの指揮で独唱者はピラール・ローレンガー (ソプラノ) らである。これは就職してから最初の給料で購入したが、給与が4万円くらいだったが2000円した。これは現在でもCDで発売されているかと思うが、ローレンガーの美しい声には本当に驚いた。合唱や他の独唱者の中からローレンガーが中央からやや右寄りに立って歌っているのがはっきりと分かるのである。技術とはこういうことか、ステレオとはこういうものかと心が震えたことを覚えている。フィガロの結婚の中のアリアかと思うような「アニュス・デイ (神の子羊)」を歌うローレンガーの声は圧巻であった。スピーカーの間にローレンガーが立って、私に歌う

のである。ステレオの立体感を身体で感じる事ができた。現在でもよく聴くレコードである。

こうした貧乏な中に思い切って購入したレコードは、50年近くたった今も手元において時々聴いている。これは決して懐かしくて聞いているのではなく聴きたくなる良い演奏だからである。音楽を記録・再生する技術はステレオレコードとその再生装置の出現で基本的には完成したと思う。この技術の完成に込められた人間の叡知に感嘆した。CDに慣れた耳にも十分に音楽を楽しめる。「人生は短く、芸術は長し」ということであろうが、レコードやステレオ装置の購入に苦勞した私には「給料は安く、芸術は高い」と言いたいのである。

